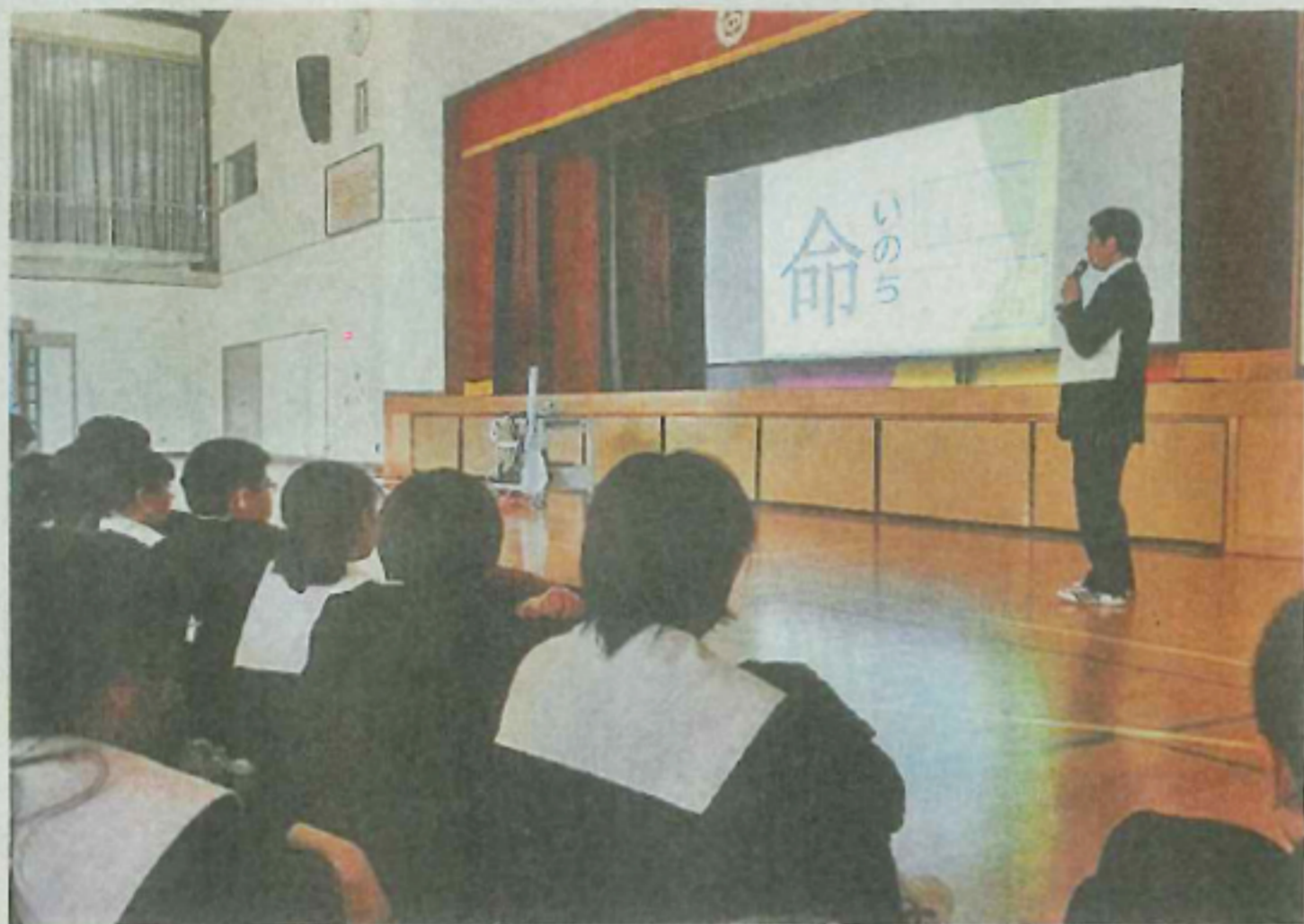


養豚場において「命において」

豚熱(CSF)への感染が確認されてから今月六日
で一年が経過した豊田市の民間養豚場「トヨタファーム」の再建を、地元の中学生たちの思いが後押しする。高岡中学校では昨年十一月に豚の殺処分を通して「命と食の大切さ」を学んだ。全校生徒四百八十一人が書いた感想文には養豚農家への感謝や激励が詰まっている。メッセージはトヨタファームに届けられた。

(森本尚平)



長坂校長(右端)が、豚熱による殺処分を通して命や食の大切さを伝えた授業。2019年11月21日、豊田市高岡中で(同中提供)
養豚農家への感謝や応援の言葉がびっしりと書かれた用紙。同中で

「養豚場においては『命のにおいて』」「食べ物を作る人は、僕たちのヒーロー」「とびつきりの感謝を伝えたい」。全校生徒が「豚熱」と闘いながら養豚場を続けようとする畜産農家の方に伝えたいことをテーマにしたためたA4判の用紙には、びっしりと感謝や応援の言葉が並ぶ。欄外や裏面にまで書く生徒もいた。

昨年三月、長坂安正校長(五)は久々に再会した卒業生から、親が殺処分に土木作業で携わったという話を聞いた。「異様な状況の中、涙を流しながら作業する現場の話聞いて『これは子どもたちに伝えるべきだ』と考えた」。日頃から、生徒たちが給食で食べ残すことも気に掛けていた。「食

豚熱の殺処分と食を学び 感想文に

べ物、命の大切さをいま一度考えてほしい」と全校生徒を集めた授業を考えた。体育館にそろった生徒たちの前で、長坂校長はまず二〇一〇年に宮崎県で起きた牛や豚への口蹄疫の流行について説明。その後、身近で発生した豚熱の被害や殺処分の様子、養豚農家の悲しみをスライドを交えて伝えた。長坂校長は「予想以上にみんなが深く理解してくれた」と振り返る。

二年の杉山晴香さん(二)の両親は県職員として殺処分に携わった。「両親がだるそうに帰ってきたのを見ていたけど、授業を受けるまでは人ごとだと思っていた」。同じく二年の河野楓さん(二)は、七つ上の兄が自衛隊員として殺処分に関わった。その様子をじかに聞き「一つ一つの食べ物にたくさんの方が関わっている。感謝の気持ちを込めて『いただきます』と『ごちそうさま』を言うようになった」と話す。

トヨタファームの鋤柄雄一社長(五)は、長坂校長から子どもたちの思いを受け取り、一枚一枚じっくりと目を通した。「実態を広く知ってほしいと思っていたが、これほどまでに深く考えてくれたのはうれしい。背中を押してもらった」と目を細めた。